

強弱を測定することで植物・生物の活動の活発さを測るものである。

刑徳七舎は北斗七星の一月毎の移動に基づいて、十二辰で分けられた天をさらに七つの空間に分けて、室天庭門巷術野と名前を付ける。この七舎の空間を、陰を表す刑と陽を表す徳が運行する。

次に陰と陽を表している刑・徳の位置を測るために、北斗七星に雌・雄の神を設定する。雄神は北斗七星の動きと同じ時計回りで子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の順に移動し、逆に雌神は北斗七星の動きとは逆の反時計回りで子亥戌酉申未午巳辰卯寅丑の順で移動する。この両者の神の位置がそれぞれ陰を表している刑と陽を表している徳の居る場所となる。雄神の位置が徳の居る場所となり、雌神の位置の対の位置（真向いの位置）が刑の居場所となる。

例えば雄の神が子のところであれば徳も子の位置にあり、逆に雌の神が子のところであれば、真向いの位置である午に位置することとなる。ほかの十二辰も同じような

操作を行う。

天を十二に分けたものを、さらに七つに分け室堂などの名称を与えたものが七舎である。門が中間地点にあり、七舎の内の室天庭は家の内側、巷術野は家の外側を指す。徳が外側にいれば陽が強くなり、刑が外側にいれば陰が強くなる。

ところで、この占いは六壬式と呼ばれている占いの基になっていると思われる。六壬式とは式占の一種で、太乙式・遁甲式と合わせて三式と呼ばれ、式盤を用いて行う占いである。式盤において、上部の円形のもの为天盤、下部の方形のものが地盤である。

刑徳七舎は天にある北斗七星の動きと連動した刑・徳が地上の生活空間を表す七舎上を移動し、六壬式では天・地盤で構成されている式盤を占いに用い、地盤の辰と天盤の辰を対応させて占いを行う。刑徳七舎と六壬式の共通点は両者ともに北斗七星を用い、天・地などの二つの面を用いている点等である。

4. 結び

最後にこの六壬式と日本との関係について述べる。六壬式は日本の占術・陰陽道に影響を与えている。安倍晴明撰『占事略決』は『黄帝金匱經』等の日本陰陽道の教科書を基に製作されたものだが、これは六壬式の占術の解説等を行っている。

結局のところ刑徳七舎が元となり、そこから六壬式の占いが派生したと思われる。

「スロヴァキア史」を研究する

井 出 匠

私が現在に研究しているのは、あえて厳密に言えば、第一次世界大戦前のオーストリア＝ハンガリー帝国における、スロヴァキア民族運動の歴史です。それで、あなたは一体何の研究をしているのか、と人に聞かれたとき、大抵の場合、私はスロヴァキアの歴史を研究しています、と答えます。

ただ、それが「スロヴァキア史」というべきものなのかどうか、つきつめて考えてみると少々疑問が生じてきます。

一九一八年、それまで中部・東部ヨーロッパの広大な領域を支配していたハプスブルク帝国が第一次世界大戦で敗北した結果、帝国は解体され、チェコスロヴァキア共和国が成立しました。じつはこの時点ではじめて、「スロヴァキア」という名称の領域が存在する、ということが公式に認知されたのです。これ以前には、スラヴ系言語の一つであるスロヴァキア語を話す人々——いわゆるスロヴァキア人が、現在のスロヴァキアの領域にある程度まとまって住んではおりましたが、「スロヴァキア」という名前の領域は公式には存在しなかったのです。つまり、チェコスロヴァキア建国以前の時代については、「スロヴァキア史」というべきものは本来存在しないはずなのです。それにもかかわらず、現代のスロヴァキアで「スロヴァキア史」というと、大抵の場合、遅くとも現在のスロヴァ

キアおよびチェコ西部にはじめてスラヴ人の王国が出現した九世紀初頭にまで遡るものとされます。なぜ、そういうことになったのでしょうか。

現在のスロヴァキアの領域は、一九一八年以前にはハプスブルク帝国の一部であるハンガリー王国の領域に含まれていました。当時のハンガリー王国は、現在のハンガリーの三倍ほどの大きさがあり、スロヴァキア、クロアチア、セルビアの一部、ルーマニアの一部を含んでいました。その中には、当然ながら、それぞれ異なる言葉を話す人々が多数含まれます。すなわち、多数派であり中央部に多く住むマジャル（ハンガリー）人と、周辺部に多く住むスロヴァキア人、クロアチア人、セルビア人、ルーマニア人、また都市に多く住むドイツ人などです。こうして、ハンガリー王国は言語的に多様でしたが、中世から近代初期にいたるまでは、そのことが大きな問題とはなりませんでした。なぜなら、王国の政治に関与できるのは貴族や高位聖職者

などの高い身分に属する人々だけであり、かれらが公式の場で使う共通言語は、エリートという言葉であるラテン語だったからです。

ところが十九世紀に入ると、王国の統治システムを近代化・民主化していくには、なるべく多くの住民が理解できる言語を公用語とするべきだ、という考えが支配的になります。そこで採用されたのが、多数派の言語であるマジャル（ハンガリー）語です。ただそうなりますと、マジャル語とは異なる言葉を母語とする人々はどうなるのでしょうか。一つの対応策として選択されたのは、公務員などのエリートになるために、公用語であるマジャル語を習得し、名前もマジャル語風に改めるなどして、いわば「マジャル人」になってしまうことです。これを「マジャル化」といい、実際に多くの人がこの道を選びました。

しかし一方で、言語的少数派の知識人の中には、自分たちの言葉を軽んじてまで「マジャル化」することに異議をとらえ、

むしろ自分たちの言葉にも公的言語の地位を与えるべきである、と主張する者が現れてきます。これらの人々によれば、たとえばスロヴァキア人は、たんにスロヴァキア語を話す住民であるというだけではなく、「スロヴァキア民族」というひとつの共同体であり、スロヴァキア語を行政や教育における公的言語として使用する「自然の権利」を持つている集団なのだ、ということになります。スロヴァキア人の民族主義者は、こうした考えにもとづき、ハンガリー王国のなかでスロヴァキア人が多く住む地域、すなわち現在のスロヴァキアの領域的自治を要求する運動に取り組みました。

その後、第一次世界大戦の結果、ハプスブルク帝国とともにハンガリー王国も解体され、チェコスロヴァキアが誕生しました。さてこうなりますと、この結果を正当化するために、帝国の解体と各民族の独立は、本来自立する権利を有している民族を長きにわたり抑圧した結果、起こるべくして起こったのだ、という説明が必要になります。そしてこの説明を裏付けるためには、「スロヴァキア民族」というものは、ハンガリー王国の支配下で消滅の危機に瀕しながらも、民族主義運動によって何とかそれを免れ、最後には自立を勝ち取った、というふうには、歴史の物語を作り上げていく必要があります。こうした要請に応えるのが、いわゆる「スロヴァキア史」なのです。すなわち、この場合の「スロヴァキア史」というのは、現在スロヴァキア領となっている地域の歴史というよりは、時代的要請にもとづいて書かれた「スロヴァキア民族の歴史」というべきものなのです。

ところが実際には、「スロヴァキア民族」という概念は、近代以前にはそもそも存在しませんでした。また近代以降も、スロヴァキア人が独自の民族であるという民族主義者の考えは、それほど広くは浸透しなかったのです。つまり「スロヴァキア史」は、運よく独立を手にしたあと、過去の時代にたいして事後的に適用された「初めに結論ありき」の物語であり、きちんとした実証に耐えられるものではないのです。歴史に限らず、最初に「こうあるべきだ」とか「こうであってほしい」という願望ばかりが先行してしまうと、証明の手續きが疎かになり、極端な場合には証拠や結果をねつ造してしまふ、という事例は記憶に新しいところです。

私と考古学

—古墳を調査する—

今城 未知

皆さん考古学にはどんなイメージをお持ちでしょうか。考古学とはどんな学問だと思いますか。考古学は、過去の人類が残した痕跡から当時の人々の営みとその変化を研究する学問です。また、対象とする時代は人類が誕生してから、そして世界中がフィールドになります。

私は元々歴史が好きで、漠然と「考古学がやりたい」「古墳時代がおもしろそう」